平成２４年４月１２日（木曜日）紀　州　新　聞

シリーズ「療育指導の話題について」②

# 発達と遊び

国立病院機構和歌山病院
療育指導室　橋本 康寛

みなさんは「遊び」についてどのようなイメージを持たれているでしょうか。大人の視点で「遊び」を考えると、仕事や勉強の合間に行う、また休日の息抜きや趣味のような事を想像されるのではないでしょうか。「遊び」を仕事や勉強とは区別して考え、レクリエーション的な捉え方をされている方が多いと思います。

次に、子どもの視点で「遊び」を考えると、全く異なるものが見えてきます。なぜなら、子どもの「遊び」は大人とは違い、子どもの動機や意志によって「遊び」になったりならなかったりする。つまり、日々の生活そのものが「遊び」となり、発達期にある子どもの「発達」と「遊び」は切っても切れない関係といえます。

それでは、子どもの「発達」に伴い「遊び」がどのように作用し、どのような能力を獲得していくのか、紹介いたします。

「遊び」は誕生初期のコミュニケーション能力が不十分な時期からすでに始まっています。大人とのかかわりの中で生活している子どもが興奮したり気分が高まって泣き出したときに、大人は子どもを抱き上げたり身体を触れるスキンシップをとるという行動をとります。この行動により子どもは安心し、泣き止んで落ち着くことができます。この大人の行動は「あやし」と呼ばれ、「あやし」の経験は子どもの気分を高めたり静めるなどの情動コントロールの機会となっているのです。

そして、次の発達段階として子どもは、大人とのかかわりを中心としていた遊びから、次第にひとり遊びを行うようになります。年齢では2歳前後で少しづつ他の子どもの遊びや活動にも目を向け、興味を示すようになります。この頃には、言語・運動面の発達と共に認知面での発達もみられ、イメージする能力を獲得し、この象徴機能により簡単な物の見立てや他者の真似が可能になってきます。そして、他の子どもの傍に行くと、同じような行動や遊びを真似るようになり、このことを「平行遊び」と言われます。そして、他の子どもと同じように真似をして遊んでいるうちに、いつの間にか一緒になって遊び始めます。一緒に遊ぶことを「連合遊び」と呼び、他の子どもと遊ぶなかで、後に役割分担やルールのある高度な遊びへと発展していくのです。初めは大人にあやしてもらっていただけの「遊び」が次第に1人で遊ぶようになり、他の子ども達を意識し真似をしたり、観察している内に一緒に遊ぶようなることからもわかるように、「遊び」そのものも変化していくのです。

「遊び」は子どもにとって、生活そのものと言え、子どもの「発達」に伴い「遊び」も変化していき、「遊び」を通して様々な仲間関係を経験することにより、自己主張・思いやり・社会的ルールの理解などの基礎的な対人関係を身につけることになります。つまり人間が「発達」していくには「遊び」が必要不可欠になっているのです。